

バングラデシュ南部避難民救援事業（2018年3~4月）

大阪赤十字病院国際医療救援部 喜田たろう

平成29年8月25日以降、ミャンマー西部のラカイン州で相次いだ激しい暴力行為を避けるために、70万近い人々が隣国のバングラデシュへ避難しました。日本赤十字社は、この人道危機に対応するため緊急対応ユニット（Emergency Response Unit、以下ERU）を派遣しており、これまでに130余名、本院からだけでものべ20名以上の要員を派遣しました。この度、ERU初動班、第2班に引き続き、最終班となる第6班のチームリーダーとして3月中旬より約6週間の活動を行いました。

ERU第6班は、日本人の医師、看護師をはじめとしてイタリア赤十字社、デンマーク赤十字社、香港赤十字社からの要員をあわせた15名が、仮設診療所、巡回診療での保健医療活動、避難民に対するこころのケアをおこないました。

コックスバザールの避難民キャンプが位置する地域は、もともと洪水などの災害多発地域で、また避難民が流入する際に、山林を伐採して居住地域を確保していることから、崖崩れのリスクが指摘されており、高台に位置する日赤の仮設診療所も例外ではありません。国際赤十字やバングラデシュ赤新月社の協力を得て、災害リスクの調査を行ない、地盤強化工事を含む様々な防災対策を実施しました。



日赤とバングラデシュ赤新月社技術要員との協議



土砂崩れ防止作業を現地作業員に指導する日赤技術要員



土砂崩れ防止のためのビニールシート敷設



サイクロン対応のための資機材を保管するコンテナの設置

緊急医療支援活動としての ERU は、この第 6 班で終了となり、今後はバングラデシュ赤新月社の医療職、避難民で構成されるコミュニティボランティアが主役となる中長期の保健医療支援事業が始まる予定となっています。

外国人医療職の比率が減少しても、バングラデシュ人医師、看護師らだけで保健医療活動を継続できるよう、技術面、管理面での指導を行いました。

またサイクロンなどで負傷した傷病者に対して、医療救護班が到着するまでの間、避難民自身により適切な対応ができるように、日赤のコミュニティボランティアを対象に救急法指導員講習を開催しました。訓練を受けたボランティアたちは今後、避難民コミュニティにおいて救急法を普及していきます。



救急法指導員研修



避難民で構成されるコミュニティボランティアへの救急法の指導

3 か月ぶりに再訪したコックスバザールの避難民キャンプは、数ヶ月続いた乾季のために、砂ほこりが舞い、避難民の住む粗末なテントやイスラム教の礼拝所、そして日赤の仮設診療所も、屋根の上に砂が降りつもり、辺り一面茶色一色で覆われていました。



日赤が設置した仮設診療所、茶色い砂塵におおわれている



デンマーク赤十字社の名誉総裁でもある、同国のフレデリック皇太子による日赤仮設診療所の訪問

雨季の終わりであった活動初期の9月頃、泥濘みのために苦労した、巡回診療拠点が位置する丘の頂上へ続く一本道はしっかりと整地され、雨季になると仮設診療所への車でのアクセスが不可能になるだろうと予測されていたキャンプ縦貫道路（Bangladesh 陸軍が建設したため、今はアーミーロードと呼ばれている。）では、レンガによる舗装工事が進んでいました。

下水による汚染の可能性の低い深井戸工事もいたるところでみられ、避難民キャンプの行政区画も新たに整備され、それらを管理する行政システムも少しずつ機能し始めているようです。

このように支援体制が充実し始めている一方で、避難民のミャンマーへの帰還はほとんど進展しておらず、先行きは未だに不透明なままで、また社会・経済的に大きな影響を受けている地元住民への支援の必要性も指摘されています。

日赤は、Bangladesh 南部避難民保健医療支援事業として、引き続き避難民への支援を継続していきます。

※国際赤十字では、政治的・民族的背景および避難されている方々の多様性に配慮し、『ロヒンギャ』という表現を使用しないこととしています。